

## 【2001年度 第1回研究報告会】

シンポジウム「GIS教育を考える」

主催：名古屋地理学会 共催：GIS学会学校教育委員会

後援：名古屋市教育委員会、愛知県教育委員会

日時：平成13年6月23日（土）

場所：名古屋大学文学部第1講義室

近年、コンピュータ上の地図に様々な地理情報を盛り込んで分析・表示を行うGIS（地理情報システム）に注目が集まっています。GISは様々な主題図を作成することが可能なことから、小、中、高等学校、大学の社会科教育、環境教育、情報教育などで活用されることによって、大きな教育効果をもたらすことが期待されています。

このシンポジウムではGISを用いた教育実践について、3名の発表者の報告をもとに議論しました。

## 学校教育用GISソフトの開発と教育実践

谷 謙二（埼玉大学教育学部）

大学でのGIS教育を考えてみると、大きくGISの原理に関する学習と、GISを利用した学習の二通りに分けることができる。

両者は相互に補完的な関係にあるが、現実の大学でのカリキュラムにおいて、同時に両者を学習することは必ずしも容易でない。

たとえば筆者の所属する埼玉大学教育学部では、人文地理学関係の授業として6種類ほどの科目が設けられているが、そのうちGISを使用するものは「人文地理学特講」「人文地理学野外実習」の2つにすぎず、後者においては学生が主体的に利用することは可能であるが、教員側から系統的にGISの利用法を解説することは困難である。また前者の「人文地理学特講」も半期の授業であり、表計算ソフトを使用しながら地域統計の分析手法を学ぶことに主眼が置かれている。こうした状況においては、まず

操作が簡便で習得が容易であり、統計データの地図化機能を重視したGISを利用することが重要である。

そこで筆者が使用しているのは、筆者が独自に開発した「地理情報分析支援システムMANDARA」である。本ソフトは容易に地図データを作成できることと、多様な主題図描画機能を持つことが特徴であり、<http://www5c.biglobe.ne.jp/~MANDARA/>からダウンロードできる。その主要な機能は地図データベースと属性データベースを結合させ、主題図を作成することである（図1）。地図データの作成方法として各種数値地図から取得できるほか、イメージスキャナで取り込んだ白地図画像からベクトル変換して作成することができる。

昨年度浜松市で行った野外実習では、自らテーマを設定しての調査を参加者に課し

たが、参加者のうち2名がMANDARAを使用してレポートを作成した。その際、筆者は何ら操作方法等を教授しなかったが、学生自らヘルプを参照し、白地図画像データからベクトル地図データを作成し、そこに表計算ソフト上で作成したデータを表示させ、印刷して提出することができた。このように、コンピュータに関して表計算ソフトを使用する程度の知識があれば、誰でもMANDARAを使用することができる。また前述の「人文地理学特講」においては、学生が一人一台ずつパソコンを使用して授業を進めており、MANDARAの都道府県別の日本地図データを使用して表計算ソフト上のデータを地図化するほか、学生が各自選択した都道府県の市町村別データを表示することなどに使用している。

このようにMANDARAの操作はきわめて簡便であるために、大学の地理教育においてはことさらGISと強調して取り上げ、学習するような存在ではない。むしろ表計算ソフトやワープロ、インターネットと並ぶツールとして自由に活用する方向が望ましい。事実MANDARAのユーザ層を見ると、

地理関係の研究者・教員は一部に過ぎず、中学生から大学生、研究者、さらに企業までと幅広い。このことは、データを地図化したいというニーズの広がりを示すと同時に、主題図に関する知識を持たずに地図化している可能性があることを示唆する。こうした点を考えると、大学におけるGIS教育以上に、初等・中等教育における地理教育が重要であると考えられる。したがって今後は初等・中等教育の地理教育においても、GISを取り入れたカリキュラムが必要であろう。

最後に、大学のGIS教育においては、当該大学のカリキュラムに応じたGISを利用することが重要である。一方冒頭で述べたように、GIS教育においてはGISを利用するだけでなく、GISの原理を学ぶことも重要であるが、この場合学部から大学院までGISに関係した学問分野を系統的に学ぶことのできるカリキュラムを用意する必要があり、全ての地理学教室で導入することは現実的でない。しかし地理学がGIS研究に寄与していくためにはそうしたGIS教育が必要であろう。

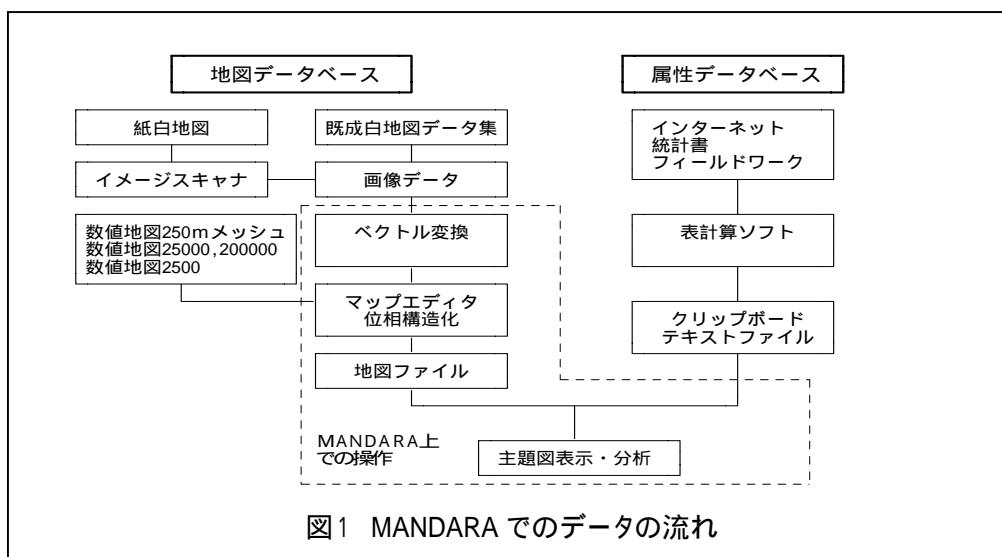


図1 MANDARAでのデータの流れ

## 総合的な学習の時間とGIS 大西宏治（名古屋大学大学院環境学研究科）

地理情報システム（GIS）は今後、ワープロ、表計算の次に必要な情報リテラシーではないだろうか。このことはカーナビゲーションに代表される電子地図も社会に広く浸透していることやマクドナルドのGISを用いた立地戦略などから推測できるであろう。これを学校教育現場で用いることができないだろうか。

GISを中高等学校の地理の授業で本格的に取り上げるには時間数の上で困難である。しかし、これから始まる「総合的な学習の時間」ならばGISを取り上げることができる可能性がある。総合学習の授業実践として行われることが多い「まち学習」の中にGISを学校教育に導入する試案を提示したい。

「総合的な学習の時間」は小中学校で2002年度から、高等学校では2003年度から実施される新たな科目で、生徒の主体的に学ぶ態度や様々な問題に自分自身で取り組み解決する資質、能力を育むことにねらいがある。各学校は地域や学校、生徒の実態に応じて横断的な課題に取り組むことになっている。これまで、環境教育など様々な題材が総合学習として取り上げられてきたが、その一つに「まち学習」がある。

「まち学習」とは生徒が自分の暮らす「まち」を調査し、様々な資料を集め、自分の暮らす「まち」について考える学習活動である。これは中学や高等学校の地理の内容を含むものであるが、他の教科との連携もとりやすいため、「総合的な学習の時間」で取り上げるには適した課題である。この課題

にGISを導入することで地理的見方・考え方が養成でき、さらに情報化社会に対応した市民を生み出すことができるのではないだろうか。

GISを用いた「まち学習」の手続きは次のようになっている。地域調査の実施  
手描きの地図を入れたポスター作成（ポスターセッション）  
調査地域の地図のデジタル化  
多様なデータによる地域分析  
結果の発表会。この作業はGISを用いるものである。

ところで、GISを中高等学校の生徒が利用可能なものであろうか。本格的なGISソフトは高価な上に操作が複雑なため、中高等学校の教育で取り上げるのは困難である。ところが最近、安価もしくは無料の学校教育用GISソフトが登場している。その中で、谷謙二氏（埼玉大学）が開発した『MANDARA』（<http://www5c.biglobe.ne.jp/~mandara/>）は教育機関へ無料で配布され、しかも手描き地図を簡単にベクトル化することができる自由度の高いソフトである。操作性も、ワープロ、表計算ソフトを利用できる者であれば短時間で使いこなせるようになる場合が多い。このようなソフトであれば中高等学校でも十分導入可能である。

自分で描いた地図がコンピュータに取り込まれ、画面上に表示されるとき、生徒たちは好奇心をくすぐられるに違いない。そして、現実世界の様々なものを地図化してとらえるとき、生徒たちは「地理的見方・考え方」を自分の手で獲得するようにならないだろうか。

このような授業実践を行うためには中、高等学校の教員、特に地理教師が GIS を利用できなければならない。今後、そのような教師を学校現場に送り出せるよう、また、GIS の研修を現職の教員ができるよう、大学は本格的に取り組む必要がある。そして、

そのような技量を持った教師が「総合的な学習の時間」や地理の教育を行うことによって地理に興味を持つ生徒が増加することを期待している。「総合的な学習の時間」を地理学界活性化の起爆剤としていきたい。

### 教育 GIS 活用に関わる課題と内外の動き 奥貫圭一（名古屋大学大学院環境学研究科）

近年の情報技術の進歩はめざましく、私たちの日常生活の中に確実に浸透している。地理情報に関わる技術についても同様で、地理情報社会とでも言うべき流れができつつある。たとえば、ITS（高度交通システム）、Web-GIS、ケータイ地理情報検索システムなどがそういった流れの主軸であろう。こうした社会的流れを見ると、教育現場における地理情報教育の重要性を痛感せざるを得ない。

地理情報社会への流れは歓迎すべきものではある。しかし一方で、この大きな流れが従来から指摘されてきた地理情報に関わる問題点を顕在化させることにもなっている。大きな問題点は、地理情報技術の恩恵を受けるための環境整備コストとそのノウハウであろう。とくに教育現場における問題は、教育を実践するにあたってのノウハウではないだろうか。こうした問題を克服するためには、個々の先生方の悩みを解決する新たな組織的活動が必要であり、実際に欧米では 10 年以上も前からこうした目的にあわせた研究教育組織が設立されている。

たとえば、米国では、NCGIA（National

Center for Geographic Information and Analysis：地理情報解析センター）が 1988 年に設立されている。本部のカリフォルニア大学サンタバーバラ校地理学科（<http://www.ncgia.ucsb.edu>）、支部のメーン大学空間情報工学科とニューヨーク州立大学バッファロー校地理学科、の 3 極分散体制で、新しい時代に対応できる研究・教育を推進する中心的役割を果たしている。この他、数年前から UCGIS（University Consortium for GIScience）なるものが全米の地理学科を中心に組織され、教育カリキュラムの検討や提案をはじめ関連する研究が積極的に押し進められている。

我が国では、海外から遅れることほぼ 10 年、1998 年、東京大学に空間情報科学研究センター（CSIS:Center for Spatial Information Science、<http://csis.u-tokyo.ac.jp>）が設立され、海外の同種の組織と同様な活動を行っている。研究者が空間データをインターネットを介して検索できる空間データクリアリングハウス、一般の方々に GIS に関わるノウハウを積極的に提供する GIS ポータルサイト、といった各種サービスの整備を進めている。東大 CSIS の活動は今後も益々推進す

べきものであるが、海外の事例を見ても、こうしたサービスが国内1カ所のみで行われるということに限界があることは明らかである。そこで、東大 CSIS では、海外の事例と同様に、全国に拠点を分散化する構想を持っている。拠点には、地域にねざした活動を行う地域拠点と、特定の分野に集中したサービスを行う分野拠点、の二つを考えており、具体的に本年4月より、北大、

東北大、横国大、名大、愛知県大、京大、立命大、大阪市大、九大の全国9校が CSIS 協力校として活動を開始した。

以上を踏まえて、名古屋大学地理学教室では、地理教育と GIS 教育の推進を考え、いくつかのプロジェクトを進めつつある。こうした活動が、近い将来、教育現場への大きな貢献となることを強く望んでいる。

### 【名古屋地理学会事務局から】

#### 第2回研究報告会のお知らせ

第2回研究報告会(シンポジウム)を2001年11月24日(土)、名古屋都市センターで開催します。テーマは昨年に引き続き『総合的学習とまちづくり 2001』です。みなさまのご参加をお待ちしております。なお、詳細は同封したパンフレットをご覧ください。

#### 第3回研究報告会のお知らせ

毎年恒例となった岐阜地理学会との合同シンポジウムを2001年12月8日(土)に行います。シンポジウムテーマは「愛岐地域における観光資源

とそのあり方」です。みなさまのご参加をお待ちしております。後日、詳細はお知らせします。

#### 2001年度名古屋地理学会巡検

2001年度名古屋地理学会巡検を4月21日(日)に予定しております。詳細は後日お知らせします。

#### 名古屋地理学会のホームページ

名古屋地理学会の様々な最新情報はホームページに掲載されます。ご参照ください([http://www.geogr.lit.nagoya-u.ac.jp/nagoya\\_geo/index.html](http://www.geogr.lit.nagoya-u.ac.jp/nagoya_geo/index.html))。

名古屋地理 第15号 - 1

2001年10月発行

編集・発行 名古屋地理学会

〒464-8601 名古屋大学文学部地理学教室内

TEL 052-789-2236

FAX 052-789-2272(文学部共通)

電子メール [ohnishik@lit.nagoya-u.ac.jp](mailto:ohnishik@lit.nagoya-u.ac.jp)

web [http://www.geogr.lit.nagoya-u.ac.jp/nagoya\\_geo/](http://www.geogr.lit.nagoya-u.ac.jp/nagoya_geo/)

# 名古屋地理

No.15-2 2002.2

名古屋地理学会

## 【2002年度 第2回研究報告会】

シンポジウム「総合的学習とまちづくり 2001」

主催：名古屋地理学会 共催：名古屋都市センター

後援：名古屋市教育委員会、愛知県教育委員会、日本生活科・総合的学習教育学会

日時：平成13年11月24日(土)

場所：名古屋都市センター大会議室

来年度から全国の小中学校で「総合的な学習の時間」が本格的に実施されます。「総合的な学習の時間」とは生徒が自ら課題を見つけ、学び、考え、問題を解決するという全く新しいスタイルの科目です。地域社会を舞台にした「まちづくり」は児童・生徒にとって身近で興味関心を喚起しやすいため、総合的学習のテーマとして、これまで多くの学校で教育実践が行われてきました。このシンポジウムでは総合的学習と「まちづくり」活動の実践を行ってきた学校関係者、「まちづくり」団体、行政機関の実践例をまじえ、「総合的学習とまちづくり」のこれからのあり方について議論しました。

## 人に優しい環境を志向する生徒の育成

- 環境評価能力を高めるまちづくり学習を通して -

加藤 俊樹 (名古屋市立新郊中学校)

### 研究のねらい

21世紀に求められる環境とは、地域を取り巻く自然環境だけではなく、まちなみ、伝統、福祉など、人々が創り出す社会環境も含め、人々の思いを踏まえたもの、すなわち、「人に優しい環境」でなければならぬと考える。そこで、「人々の思いを踏まえた環境」という視点から、望ましい環境に向けて解決すべき問題をつかみ、地域の環境に対する自分なりの考えをもつことのできる生徒」の育成を目指そうと研究題目を設定した。

本研究では、以下に説明するような環境評価能力を高めるまちづくり学習を通して、人に優しい環境を志向する生徒の育成を目指し、その手だての有効性について検証するものとする。

研究の方法～環境評価能力を高めるまちづくり学習の進め方～

### 1 環境評価能力を高める2段階のアプローチ

### 一 一

(1)「人々の思いを踏まえた環境」という視点から考える能力」を高めるために〔第1次授業実践〕

人々の思いにより環境を守りながら開発を進めてきた過去の事例を取り上げ、地域の人々から環境に対する思いを直接聞き取る。そして、聞き取りによってつかんだ人々の思いを基に、地域の望ましい環境の在り方を考える。

(2)「望ましい環境に向けて解決すべき問題をつかむ能力」を高めるために〔第2次授業実践〕

人々の思いを踏まえた環境という視点から、地域の環境を評価するための基準を作り、作成した評価基準により、地域の環境を評価する活動を行う。そして、評価活動によってつかんだ問題に対し、地域の将来に向けた解決方法を考える。

### 2 まちづくり学習における基本的な学習展開

### (1) 見出す段階

地域の環境を焦点化して観察できるように、対照的な二つの景観を比較したり、1枚の写真の中から対照的な特色を探したりするような、景観の写真を読み取る活動を取り入れる。この活動により、地域の環境の在り方に対して問題意識をもつことができるようにする。

### (2) 追究する段階

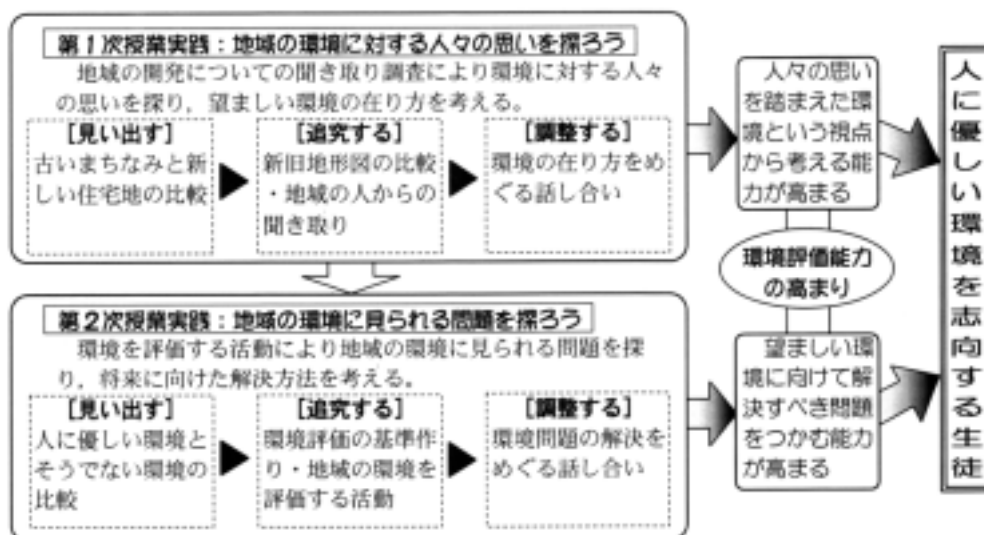
見出す段階でもった問題意識を学習課題として位置づけ、その解決に向けて、地

域の人との交流や地域の環境調査など、実際に地域に出る体験活動を通して追究する。この活動により、人々の思いや地域に見られる解決すべき問題をつかむことができるようにする。

### (3) 調整する段階

地域の解決すべき問題について、追究して分かったことを基に、合意形成を目指した話し合い活動を行う。この活動により、地域の環境に対する自分なりの考えをもつことができるようにする。

## 3 環境評価能力を高めるまちづくり学習の展開



### 研究の成果

第1次授業実践では、地域の環境に対する人々の思いを直接聞き取る活動を行うことによって、多くの生徒が人々の思いを踏まえた環境という視点から考えることができるようになった。また、第2次授業実践では、人々の思いを踏まえた環境という視点から地域の環境を評価し、つかんだ問題の解決方法を話し合う活動により、人に優しい環境に向けた自分なりの考えをもつことができるようになった。

このように、環境評価能力を高めるまちづくり学習を進めたことにより、人々の思いに照らし合わせながら解決すべき問題を

つかみ、地域の環境に対する自分なりの考えをもつことのできる生徒、すなわち、人に優しい環境を志向する生徒が育ってきたと考える。

しかし、実践を進める中で、いくつかの課題にも突き当たった。一つが、環境評価にかかわる課題で、もう一つが、人に優しい環境に向けた行動化にかかわる課題である。今後は、これらの課題を解決しながら、環境評価能力が高まっていくような学習方法の在り方を探っていきたい。そして、生徒が主体的にまちづくり学習を進める中で、人に優しい環境を志向し、行動を起こせるような生徒が育つようにしていきたいと考える。

## 川を子どもたちに引き継ぐこと

～川に学ぶ社会をめざして～

近藤朗（愛知県建設部河川課）

### 1 河川行政の転換

河川行政が変わりつつある。平成2年頃より河川環境を明確に意識し始めてからだろうか。当然の流れとして、河川と人との関わりに目を向けるようになる。本来、地域固有の河川環境や文化は人々が積極的に（あるいはやむにやまれず）川と関わったことから生まれたものであり、現在この関係が損なわれたことから多くの問題が生じていることに気付く。

平成9年に河川法が大幅に改正され「河川環境の保全と整備」を河川管理の目的とすることができるようになった。以後、「川に学ぶ社会」、「パートナーシップによる河川管理」、「市民団体との連携」などが次々と提言されており、河川行政の中で地域と河川との関わりを重要視する姿勢が打ち出されている。「川を総合的な学習の時間に生かす」ことについては、この10月に国土交通省が情報提供のためホームページを開設したばかりである（「川で学ぼう」<http://www.kawamanabi.jp> 学習素材検索、学習プログラム作成支援）。

情報収集の手段として十分活用されればよいが、当然ながら「川に学ぶ」ことそのものの意義はインターネット上では得られない。まず川に行き、川を知ることから始まる。

*「川や森などの自然は神様が創り、我々はそれを神様や子孫たちから借りているだけだ。」*という伝承は、民族が経験から認識した知恵でありルールであったろうが、今でも（今だからこそ）問われるべき人間と自然環境に関わる本質ではないかと思う。しかしながら、このことは川など自然との関わりを直接体感していなければ、認識しえないだろう。かつて川が子どもたちの遊び場、学び場だったことの意義は大きい。

河川行政において「川に学ぶ社会」が認

識、提言されてはいても、これを支える体制、地域社会が直ちに構築されるものではない。水辺にふれることの楽しさがなくなり、川に関わることの煩わしさを遠ざけてきたのが現代社会であり、これを復興しさらに新しい社会情勢の中に息づく地域システムを構築していくためには、行政・市民双方に新しい認識とパワーがいる。両者の間に緩やかな合意形成も必要である。そのためには未来を見据えた、子どもたち（子孫たち）のための視点が重要となろう。

### 2 愛知県における取組みなど

愛知県（河川管理者）においても、学校で子どもたちが川に学ぶための支援やパートナーシップによる川づくりを徐々に始めたところであるが、このような取組みは我々の仕事として明確にオーソライズされたものではない。これが総合学習の本格的運用にあたっての課題となろうが、担当部署の裁量により自由な発想での対応を生み出している部分でもある。おそらく現在、行政現場での対応に温度差が生じているだろうが、これは河川管理者として、子どもたちを相手にすることの意義を認識できるか否か、によるところが大きい。

愛知県には、われわれに大きなインパクトを与えた学校活動がある。豊田市西広瀬小学校児童は、昭和51年7月から一日も休むことなく矢作川水質監視活動を続けており、二年後（2003年11月）には連続観測一万日（約27年間）に達する。彼らの透視度データは毎日大きく学校や市役所で表示され、流域での水質保全活動にも多大な影響を与えてきた。彼らの力は決して小さくない。

新しい流れの中で、河川管理者が学校と関わりを持ったのは、同じ豊田市で平成5年から堤小学校児童と「逢妻女川の改修を検討する会」を組織してからである。当時



から堤小学校は「特色ある学校づくり」実践として、学校の横を流れる逢妻女川をあらゆる授業の中に取り入れていこうという試みを行っていたが、われわれはこの区間の河川改修計画を立案するにあたり、日々の観察者である子どもたち(4~6年生)に意見を求めることとした。「木や石などの自然の材料で川をつくってほしい。」との要請を受け、柳の木と自然石を組合わせた柳枝工という伝統的河川工法を採択したが、この頃から河川管理者も自然環境に配慮した多自然型川づくりに取り組み始めたという背景もあった。この検討会は平成9年まで続けられたが、子どもたちの毎日の観察に基づく鳥や魚などの情報量は「365日の川」を意識した時、有意義なものとなる。

「川にすべり台をつくってほしい」などの要望には応えていない。川に自然を求めらるるのであれば、堤防の草地斜面をダンボールのソリで滑ったらどうか、などと議論しながら止めてもらったが子どもたちが本心から納得したのかどうか今でも自信はない。これは検討会の中でも結構大きなテーマであった。

平成9年から愛知県岡崎土木事務所では、様々な試みを実施した。例えば、岡崎市美合小学校ではホタルの保護活動を古くから実施しているが、子どもたちがフィールドである山綱川に入る機会は多くないとのことであり、全校児童を対象に川に対する思いを形(絵、模型、作文)にしてもらうコンペと、その思いを河川管理者(岡崎土木事務所)にぶつけようという児童集会を開催してもらった。その中で、われわれが提案したのが「水辺の緑の回廊」整備という生態にも目を向けた川沿いの植樹活動であり、単なるイベントではなく川づくりに参画しながら水辺林をつくることの意義を考えようと訴えた。先生方や地域の理解も得られたため、平成10年から400名全児童が主体となった植樹、川づくりをスタートさせ現在に至っている。

ちなみにこの「水辺の緑の回廊」整備は新しい川づくりの手法として、「河川の自然への回帰」、「市民参加」をテーマに展開している取り組みであり、平成9年から今までに県内13河川で実施した。延べ1万5千人

の手により18万本の苗木が植えられたが、NPO等市民団体、自治会、学校などと様々な形態でのパートナーシップを構築してきており、いずれも子どもたちの参加は多い。

岡崎土木事務所管内では、学校側からのアプローチも多かった。岡崎市六ツ美南部小学校、額田町大雨河小学校や幸田町中央小学校などとは、川に関する学習会(あるいは授業参加)を行うとともに、子どもたちと一緒に川を巡視して歩く「河川ふれあい点検」なども実施した。場合によっては、地域住民の方々にも同行してもらい新旧世代の意見交換を図ることもねらいである。

当時、さまざまな地域の学校が河川に目を向け出した状況を見て、思い描いた構想がある。水系・流域内などでの小中学校ネットワークが構築できれば、有効な取り組みができるのではないかと。河川の源流から海まで、支川も意識しながら、その繋がりや違いなどを認識できれば、学校の活動も発展性が著しく増すものと考えた。われわれは、教育行政に口を出す立場にはないが、「水辺の学校ネットワーク構想」なるものをまとめ、事あるごとに興味を持たれた先生方などに提案し、あるいは他校の活動状況なども情報提供してみた。学校管理の問題もあるため、一朝一夕で構築できるものとは思わなかったが、中には大雨河小学校のように子どもたちを引き連れ校区外(額田町外)へ飛び出してくれた学校もあった。山間地で水質悪化問題に取り組んでいた児童は、下流域の美合小学校に行き、山綱川を見て、都市河川の環境悪化にカルチャーショックを受けていた。その美合小学校も「水辺の緑の回廊」植樹を続け、そろそろ上流側の藤川、山中小学校区へバトンを渡し、山綱川でのネットワークを繋ごうとしている。このような取り組みは、学校現場での障害もあるだろうと想像するが、本格的な総合学習の展開にあたっては検討すべき課題だと思う。同様の取り組み(ネットワーク)を試みた「矢田川サミット」(名古屋市、瀬戸市など32校参加)は、その後の話が聞こえてこない。1回だけのイベントだとしたら、惜しい。

ここ2~3年ほど、小中学校などからの

河川に関する問合せは増えてきている。情報提供としては、まず対象としている河川の流域を示し、源流と河口、その中での学校の位置、河川改修が行われていればその内容と場所などの地図情報をお知らせすることから始めている。学校でも、これらの情報は意外と知られていない事が多い。通常、校区内の川・水辺のみを学習対象としているからである。

今年の動きとして、名古屋市守山区の廿軒屋小学校に矢田川の流域情報を提示したところ、瀬戸市の源流部と河口部の藤前干潟まで行かれているという事例がある。特に河口部においては、市民団体である「藤前干潟を守る会」の協力・案内も得られ、子どもたちも貴重な体験ができたようである。直接流域の姿を見ようというフットワークの良さと、市民団体とのパートナーシップによって、新しい形が示唆されたような気がした。さらに、新しい取り組みとして毎年われわれが定期的実施している「水辺の国勢調査」という魚類調査を、小学校への公開講座として行う手法を試みた。今年度、新川で行った捕獲調査を名古屋市北区の楠小学校児童に公開し、魚類の生息状況や捕獲方法などを直接見て学んでもらったのである。調査そのものは、通常業務として行われるものであり、説明資料の作成やガイドに若干の手間をかけただけである。場合によっては、庄内川流域で活動している市民団体「矢田・庄内川をきれいにする会」などの協力を得ることも可能だったと思われる。

実のところ、今後の対応のあり方を検討し、「川に学ぶ社会」を進めていくためには、行政だけでなく市民団体などを含めた地域社会の支援が不可欠だと考えている。今後、学校や子どもたちから「川に関わりたい」という要請がさらに高まっていくとすれば、(嬉しいことであり)われわれも何らかの方向性を内外に発信する必要がある。このために来年度、いくつかの協働作業を検討している。豊橋市の「NPO 朝倉川育水フォーラム」とは既に「水辺の緑の回廊」整備などでパートナーシップを構築しているが、さらに朝倉川環境調査やマップづくりを委託し、その中で子どもたちに関わっ

てもらうための手法を検討していく予定である。豊川市の「NPO 佐奈川の会」、稗田川で活動する「NPO たかはま」、豊田市の「矢作川川会議」実行委員会などの市民団体においても子どもたちに目を向けた取り組みを提唱しており、協働(コラボレーション)事業のあり方など模索してみたい。そのためには、河川管理者を含めた行政関係者、学校関係者、市民団体や地域の方々などが同じテーブルで議論していく場が必要になるだろうと考えており、このような地域ごとの「水辺協議会」の設置も提案していきたい。

### 3 課題など

今まで、いくつかの学校と関わってきた中での課題・問題点を整理してみる。

(学校側から)

- 河川に関わる情報が不足している。
- 何を教えたらいいのかわからない。
- 河川管理者がわからない。(アプローチに苦労した。たらい回しにされた。)
- 河川管理者など行政が非協力的である。冷たい。
- 河川管理形態が複雑である。(河川管理者/道路管理者/公園管理者など)
- 川に入りたくても入れない。(柵がある。階段がない。よい子は川で遊ばない。)
- 安全対策に不安がある。(よい子は川で遊べない)
- 川に入るには、水質が不安である。
- 良好な水辺がない。
- 水生生物調査などをしたいが、ノウハウ・器材がない。
- 学校活動での制約条件が厳しい。(地域差、学校差大)

(河川管理者から)

- 学校、子どもたちと関わる経験がなく、とまどう。
- 何を教えたらいいのかわからない。
- 時間的余裕がない。
- 河川改修事業を予定していない川では、話し合うべきメニューを持ち合わせていない。
- 学校の活動が、河川管理上の問題点となる場合がある。(花壇設置など)
- 安全対策に不安がある。(河川管理責任を問われる。)

(行政・学校との連携の中で)

- 河川管理者は継続的な活動を望むが、学校のプログラムは1年単位でしか決められない。
- 行政担当者、あるいは先生の異動により連携活動が絶たれる。継続性がなくなる。
- 学校での制約条件などにより、ネットワーク構築など幅広い展開ができない。
- 学校の思惑と地域の意向が大きく異なる場合があり、取り組みがこじれる。
- 地域の理解が得られないことがある。
- 河川管理者の施策も地理的条件などによって実施できないことがある。
- 時として、河川管理者は要望に応えられない場面もあり、子どもたちを傷つけることもある。

多くの課題は、行政と学校、あるいは地域が十分話し合い、認識と理解を深めることで解決できるのではないかと思う。学校との連携も子どもたちの要望をかなえること

を主目的にするものではなく、「川に学ぶ」ための柔軟な手法が検討されるべきである。河川は本来、豊かで身近な自然環境を有する場であるが、同時に水利等複雑な調停の場でもあり、洪水等の脅威も忘れてはならないだろう。そのようなことを全て含めて、私たちの生活と深く関わっている河川をよく知り、思いを馳せることが重要なのであり、地域社会全体で支えていきたいと願う。

川に学ぶこと～子どもたちからの発信

わたしたちと川との関わり

川に学ぶ中で、最も重要な点はつながりの認識だと思います。自分と川とのつながりを認識して初めて本当の意味での興味を持てるのではないのでしょうか。そこから上流や下流へのつながりへと意識が向けられれば、(流域)社会としてのつながりも認識されていきます。下は豊田市堤小学校5年生の作文です。

やっぱり女川につづいていた！

自分の家の水が、本当に女川に行っているのか、まいちゃんといっしょにたしかめました。ずっと、どぶをたどっていくと、いろんな家から水が出ていました。それが私の家の水といっしょになって流れていきます。広いどぶになって水も多くなりました。ずっと行くと、ぶた小屋の近くで女川にでました。私の家の水は、やっぱり女川に続いていました。

川らしさの認識

これは、名古屋市立弥富小学校四年生担任の先生から伺った話です。

四年生は当初、総合的な学習のテーマとして山崎川を選び川遊びに行ったそうです。山崎川は市民に親しめる川として階段護岸などを整備した公園的な河川です。水辺に近づきやすいため、最初はみんな喜んでいたのですが、なぜかその後は飽きてしまいました。そこで場所を天白川に変えたところ、今度は子どもたちも飽きることなく活動を続けたそうです。天白川のこの場所(瑞穂区内)は、草が繁茂し近づきにくいものの、まだ改修前

の土手の残る河川であり、虫や花、魚など行くたびに新しい発見をしてくれます。その内、先生に言われたわけでもないのに、ゴミを拾ってくるようになり、土日には親を連れて遊びに行き始めたとのこと。この話は河川管理者としても大いに考えさせられる内容です。本当の川らしさというのは、子どもたちの体験から認識されてくるものかもしれません。

川への想い

次は、岡崎市六ツ美南部小学校の総合学習「広田川」からのメッセージであり、想いが伝わります。

あ～!ゴミ!!

「あっ、お父さん、何ポイすしてるの!」

「え?」

「そうやってポイすしてる人がいるから川が汚れていくのっ!わかる?」

わたしがそんなことを言うようになったのも、総合学習がきっかけ。川へ行ったら、ゴミがたくさん落ちていたのだ。前はあまり。いや、全然、う～ん少しは...でも、たいして気にならなかったのは事実。でも今では、なんか気になるといふか、ポイすしてる人を見ると、ムッカーとなんかいやな感じ。だからお父さんに、「ポイすしないでよ!」と言ったのだ。

でもわたしは、「ポイすしてる人ってけっこういるんだよね。やっぱりそういう人たちがいると、川が汚くなるんだよ。」と思った。

川に学び育むところ

同じく、岡崎市立六ツ美南部小学校の総合学習「広田川」からの記録ですが、川に

興味を持ち始めた児童が周囲とも関わりを持てるようになり、成長していった様子が見えがえします。

S : この魚はなんて言うの。

F : これはカマツカだよ。

S : なんでツチフキじゃないの。

F : ツチフキはね、もっと頭のところがつぶれたみたいになっているんだよ。この魚は頭が長細いでしょう。

S : これはなんていうの。

F : これはオイカワの稚魚だよ。

S : どうしてそんなことがわかるの。

F : だって僕オイカワを育てたことがあるもん。今はなにも模様がないけど、大きくなると、模様が出てくるんだよ。

C : すごいなあ。

Sは友達とのかかわりをうまく持てずに、問題を起こしてしまうこともある。しかし総合学習では、自分の興味を持っていることをたくさん学習に生かしていくことができ、喜んで活動していった。また、自分の発言が認められるにつれて、自信も深まり、情緒的にも安定して友達と関わるができるようになってきた。

冬休みを終えて、総合学習では、まずクラスとしての理想の広田川をまとめ、それから、どうすればそのような川になるのか調べ、活動していくこととなった。

C : 魚や亀がたくさんいる川がいいと思います。

S : カメはカメでも、いま広田川にいるのは、ほとんどがアメリカミシシッピ - アカクビガメだから、アメリカからきて繁殖したカメです。僕は、もともと日本にいたカメが増えてほしいと思います。

T : すごい考えだね。日本では今このことが問題になっているんだよ。外国の魚とかを放流して日本の魚が食べられてしまったところもあるんだよ。

C : 知ってる、知ってる。ブラックバスでしょう。...

S : 広田川は、この辺よりも幸田町のほうがきれいだと思います。冬休みにいろいろな鳥を見つけたんだけど、幸田町のほうでカワセミを見つけたからです。

Sは、今まで自分から進んで調べた広田川の生き物について調べてきた。冬休みには、広田川の野鳥を観察し、カードにまとめた。

じっくりと観察をしているSの発言は、説得力がある。

自分が興味を持って調べたことが、授業の中で取り上げられ、友達にも認められた。この喜びを持ったSは、この後も積極的に発言を重ねていった。

このような子どもたちからのメッセージ  
を見ていると、河川管理者としての思惑も、

先生方の願いも、結局のところ同じところ  
に行きつくような気がします。

## 都市中の里山保全と総合学習 堀田 守（猪高緑地自然公園愛護会）

猪高緑地自然公園愛護会と別名で名東自然倶楽部を組織して両代表を努めさせていただいております。堀田 守と申します。本日は、テーマ都市中の里山保全と総合学習を頂いていますが愛護会活動と自然倶楽部活動がリンクしておりますので、名東自然倶楽部と猪高緑地自然公園愛護会の活動紹介発表とさせて頂きまことをまずお断りさせていただきます。

### フィールド・位置概要紹介

名古屋市内・・・東部丘陵地帯（小高い丘の連続）・・・緑地帯がなくなってきた・・・子供も遊ばない

### 名東自然倶楽部&猪高緑地自然公園愛護会の紹介

生涯学習の観点より自然関連の自主講座開設・自然環境を考えられる次に続くリーダーの育成を目指して活動中。

### 都市中の里山保全

平成10年7月名東生涯学習センターにおいて、名東区の自然を考える講座「ぐるっと名東緑地めぐり」終了後、講座受講生が自主的に会を組織して、社会教育・生涯学習の一環として名東自然倶楽部が発足猪高緑地をメインフィールドとして勉強会が始まりました。平成11年からは、街の中に残さ

れた緑地帯のあり方をテーマにシンポジウムを開催しています。以来、いろいろな人たちが倶楽部のグループ活動として、同じコンセプトのもと猪高緑地にかかわりを持つようになりました。現在いろいろなスタッフがそれぞれの活動を行っています。愛護会としてのメインテーマは緑地内での竹林化が問題となっており、森の管理（竹刈作業）で刈り取った竹の処理として、竹炭焼きの活動を行っています。また、以前より名東自然倶楽部が提案してきました放置された緑地帯に、本年3月に里山のパーツのひとつとして、棚田の田んぼが復元されました。自然生態系から見た里山のパーツ保全としては大歓迎です。そこでの雑木林への復元、田んぼもテーマとしての活動も始まったところでもあります。作業は、田おこしから始まり、5月には、名東区役所主催「メイトーの日週間」の中で区民を対象に田植え体験を企画開催しました。以降田んぼの管理 夏の草取り・秋の稲刈り11月3日の区民祭りには、脱穀体験（当日雨の為中止）を愛護会主体で開催しました。又、自然倶楽部として田んぼでは、かかしコンテストも企画し、地元小中学校・地元老人会・子供会に声かけを行い35体も出展され高評を頂いております。各行政機関とのパートナーシップをとりつつ、ファシリテーターとしての活動も行っていきます。

## 総合学習への協力

そんな中、平成 11 年に区内の小学校の先生より総合学習のあり方を模索しており、学校と地元のかかわりを授業の一部として取り組みたいと名東自然倶楽部へ協力の相談がありました。昨年より、猪高の自然に親しむ活動・自然物を使った工作・環境問題への取り組みとして、自然に親しむ活動・森の中のごみ拾い等、学年によりテーマを決めいろいろな場面で街のおばさん・おじさんとしてスタッフが協力させていただいています。本年も小学校 5 年生 6 年生を対象に田んぼで、田植えから稲刈りまでの取り組みを総合学習のひとつとして提案させていただき、いろいろな協力をさせていただきました。稲刈りも無事終わり、先日、先生に感想を伺ったところ、これも総合学習のひとつのあり方ではないかなと思う出来事も体験できたといわれておりました。それは、「街中の田んぼでかかしコンテスト」のチラシがテレビ局の目に映り、子供たちの稲刈りの時、現地生中継で TV 放映がされました。その中継の為に協力した人が、テレビ局の若いスタッフたち・学校の生徒のお母さんたち・地元の稲刈りを指導してくれた老人会の人たち・お百姓さん・土木事務所・他学区の田んぼグループのお母さんたち・名東自然倶楽部会員・愛護会田んぼグループ会員といろいろな方たちが、朝早くから準備段取りの為に、いろいろな場面の役割と仕事をしている姿を直接見て体験できたこと、もちろん子供たちも稲刈り体験を TV 出演したのですが、これが子供たちにとっても「人とのかかわり」の体験ができ・そんな中に子供たちの目で見た発見も

あり一番印象に残る出来事になったと思います。<結果はすぐには出ないと思いますが、いつかここにきてこんな体験をしたよと子供たちが次の世代に伝えてくれる子もきっと出てきます>と我々のコンセプトに結びつく言葉も聞かれ、保全活動にも張りが出てくる嬉しい言葉を頂きました。我々にとっても「田んぼの自然環境・地元の人とのかかわり・米作り・働く人々・生きる力等々」振り返ってみるとお手伝いした事で、田んぼというフィールドにおける活動がすごく勉強になり、参考になりました。

## 総合学習における受け入れ側から見た問題点

フィールドワークを通して我々から見た総合学習協力への問題点もいろいろ見えてきました。

### 1. 安全面から見た問題点

猪高緑地は自然生態系も重視した緑地帯であり、マムシ・毒虫・かぶれる木々等自然との付き合い方を無視して入ると危険です。子供たちにとってワイルド感があり元気のいい個は道を外れる子もいます。細いでこぼこ道を歩くため列が長くなることもある。そんな時案内スタッフが不足気味になりがち

### 2. 学校授業である為、時期開催日が平日が基本の為スタッフ不足

メンバーは、サラリーマン・自営業・主婦・学生です。自分自身の予定もあり仕事もあるため、メンバーの調整がだめなときが多い。主婦層に負担が多くなる。

### 3. 取り組み側の先生も自然についての興味などない先生は我々に任せきりのと

きもある。

倶楽部員は市民活動でのボランティアであり、学校教育授業の中であるなら主体は先生のはず、もっと先生自身の勉強・熱心さも必要ではないかと思う。

4. 先生の元気が必要！

子供たちは、ゆとりのある教育より教育のないゆとりの時間は、すごく元気で走り回る。フィールドでは、のびのびとした子供の姿が見られる。元気の先生でないと見ていて気の毒

5. 受け入れ体制を持つ団体の紹介が少ない。学校単位でなく熱心な先生の個人レベルでの口コミでの依頼が多い。教育委員会の中で、総合学習を行える団体の把握と相談窓口を作るべきと思う

(今後の方策等があれば情報がほしい)

6. 経費はかかっている

ボランティア協力はよいのですが、頼まれた人たちにも相当な負担がかかっていることを認識しておいてほしいと思います。学校教室へ行っての自然教室は材料準備、しかけづくりなど前日・前前日には、フィールドへ材料を

取りに行ったりして、目に見えないところで段取りを行っている認識をしておいてほしいとおもいます。

7. 総合学習は学校としての取り組みであり、われわれの活動は、生涯学習の範囲で行われている

あくまで自分個人のスキルアップの活動が目的の活動として行っている為、その人の思想が入ってしまう時もあり倶楽部としても気をつけなければならない点がある。

8. 県内他地区の学校より依頼があり電車で送り込むから何時の電車で返してほしいと生徒の受け入れを頼まれた。先生の引率無しとの事であった為、安全面で問題ありと判断してお断りした。

いろいろと倶楽部内反省会で話合いがされていますが、学校と地域社会とのパートナーシップとはどんな受け入れ方がよいのか？

倶楽部課題として受け入れ体制の検討を行い、今後もできる協力は惜しまず活動を行っていこうと思っています。この発表が、今後の総合学習の取り組みの参考になれば幸いです。

### まちづくり総合学習を通じた地域パートナーシップの創造 寺本 潔 (愛知教育大学)

「まちづくり」の進展には、その前提として地域への愛着が欠かせない。「まち」のことを十分に知るためにも、「まちづくり学習」なる住民による「まち」の主体化がなされる必要がある。

とりわけ、子どもと学校という窓口は、

地域の様々な大人や課題を引きつけるものになり、「まちづくり」の仲介者(エージェント)としての役割を担っている。

本発表では、筆者が最近精力的に関わった愛知県西尾市の城下町地区における小学校の総合学習を中心に「まちづくり学習」

の有効性を確かめることがねらいである。

総合学習の展開に際し、そのカリキュラム構成の基本に1．愛着、2．共感、3．参加、4．提案の4つを位置づけた。

### 1．愛着 (attachment)

いわば、環境への「なじみ」と言い換えてもよい。町の環境への親しみを深める学習を設定し、何度でも対象と関わることを通して、場所や人への親密感を強めるのがねらいとした。

たとえば、1年生に行った「この木・なんの木・ぼくらの木」(66時間)という学習では、最初に校庭に生えている樹木と五感を通して触れ合わせ、しだいに通学路や街角の樹木にも注目させながら、「この松はお父さんが幼稚園の頃にもこの場所にあっつとって好きだったよ」、「たばこ屋の隣のザクロの木は60歳以上だっておばあさんにおしえてもらったよ」と地域の大人と愛着のある樹木を共有させていった。

そして、最終的には「わたしが大人になっても、この木は生きていてほしいな」と情緒的な思いに達し、町の中に自分が大好きな場所や人・ものがリアルに存在することを自覚させていくように促した。

また、2年生の場合にも、学区に伝わる民話を地域の大人にインタビューさせて採集し、お話しの舞台が学区に現実に存在することに気づかせた。このことは、身近な地域に昔から言い伝えられてきた人々の体験や教訓などが、民話の形に変わって残存していることに気づき、お話しの舞台になった場所への愛着を強めることにつながるのではないだろうか。

### 2．共感 (sympathy)

周囲の環境に対し、主客未分化な愛着の段階から、一步、客観的に対象を見つめることのできる資質が「共感」である。例えば第4学年で扱った「ぼくら城下町の水探検隊」(35時間)という学習では、「めずらしいオタマジャクシと思って、喜んであつめたんだ」「しっぽが曲がったのや、目玉がないのや、いろいろや。でもね、おじいちゃんが、そりゃみんな奇形だって教えてくれてびっくりして逃がしたよ。」というように都市河川の汚染(環境ホルモン以上)で病んでいる魚や川の水に精神的な痛みを共感できる資質を育てるように設定した。地域との連携では市役所環境保全課や環境NPOから、EM液を下水に流すことの有効性が示唆され、下水浄化の行動にまで発展し、環境改善への参加も一部果たせた。

### 3．参加 (participation)

さらに、高学年においては「参加」といった言葉を到達したい資質目標として設定した。「参加」という言葉では、ニューヨーク市立大のロジャー・ハート教授が提唱している子どもの社会参加論における「参加の梯子」が有名である。1段目の「操り参画」とは、子ども自身が意味もわからず社会問題への解決へのイベントに参加する場合であり、2段目、3段目も大人(教師)による指導・指示に終始する形である。

少なくとも「まちづくり学習」では、4段目以上の「与えられた役割の内容を認識した上での参画」にまで子どもを高めていく必要がある。

西尾小学校では、5年生が学区の味噌醸造会社を調べ、赤みその優れた栄養価、西



尾の歴史的文化的な宝としての味噌や味噌蔵への愛着や共感を持ち、オリジナル味噌造りまで発展した。学習に協力してくれた地域の味噌醸造会社の当主は、「3学期に味噌が完成し、試食会に招待されました。子どもたちの発想の豊かさに驚き、味噌汁を残さなくなった子どもがいると聞き、大変うれしくなりました。総合学習と言うことで、今回、町の先生としてお手伝いできたことに感謝すると同時に、(中略)町に出ることにより、生活の匂いを感じ、よりたくましい大人に成長することを願わずにはいられません。」と述べている。地域の食文化の価値を調べ、味噌文化の保全に参加していったのである。

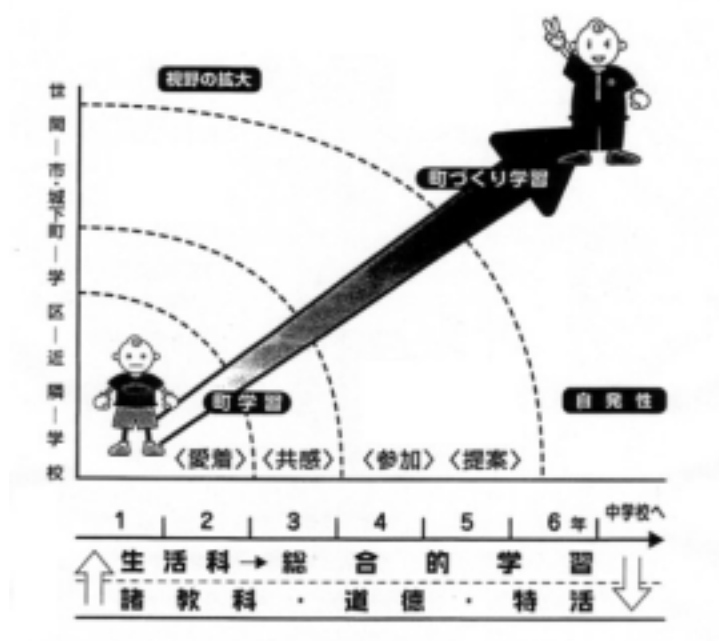
#### 4. 提案 (proposition)

そして、最終学年である6年生では、「提案」能力の育成を求めた。「西尾の町改造計画」(32 時間) という単元がその典型例で

ある。ここでは、単に「こんな町あったらいいな」というような荒唐無稽な夢プランを提案させるのではない。あくまで、現地でのニーズや問題点を汲んだ改善案を練るのである。子どもによっては、市役所の都市計画課や福祉課、名鉄西尾駅に取材に訪れたり、市民へアンケートを配布したり、公園の土地の実測を実施したりするなど、まるで、都市計画教育や建築学教育の基礎にも匹敵する学習活動を展開した。

これら4つを基本に据え、全学年で展開できる「まちづくり学習単元」を開発した。

その結果、「まちづくり学習」は、地域の一員としての主体者形成にきわめて有効な方法であることがわかった。学校と地域のパートナーシップが模索される中、こうした試みが、新たな「まちづくり」を促すきっかけとなることが期待される。



【名古屋地理学会事務局からお知らせ】

名古屋地理学会巡検のお知らせ

名古屋地理学会巡検「知多半島にみる愛  
知の未来」と題して4月21日(日)に行  
われます。参加ご希望の方は、同封のはが  
き、または電子メールでお申し込みくださ

い(巡検詳細は別紙)。

2002年度第1回研究会の発表者募集

2002年度第1回返球会(6月29日を予定)  
の発表者を募集します。発表希望の方は事  
務局までご連絡ください。

名古屋地理 第15号 - 2  
2002年3月発行  
編集・発行 名古屋地理学会  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学文学部地理学教室内  
Tel 052-789-2236  
FAX052-789-2272(文学部共通)  
電子メール ohnishik@lit.nagoya-u.ac.jp

# 名古屋地理

No.15-3 2002.6

名古屋地理学会

【2002年度 第3回研究報告会】

岐阜地理学会・名古屋地理学会合同シンポジウム

「愛岐地域における観光資源のあり方とその問題点」

日時：平成13年12月8日（土）

場所：TAKUMI Museum

## わかりにくさを魅力に変える街づくり - 名古屋名駅地下街を事例として - 渋谷直正（日本航空）

近年、都市そのものの魅力を楽しむ都市観光が注目を集めている。それは、わざわざ出かけていく観光ではなく、いつもの街を気軽に楽しむという新しいスタイルの観光である。シンポジウムの事例報告では、このような都市観光の可能性を秘めた名古屋名駅の地下街を事例に、その魅力を高める方策を提案した。

近代的都市計画の見本のように整然とした名古屋の街にあって、名駅の地下街は複雑でわかりにくい、そこは街歩きを楽しむような不思議な魅力を備えている。この地下街の魅力はわかりにくいことであり、それを活かした街づくりが今求められる。

魅力的な都市空間とは、「わかりやすさ」と「わかりにくさ」が適度な割合で共存する空間である。近代都市計画の目指した効率的で整然とした街並みはたしかにわかりやすいが、人間的スケールを超え面白みに欠ける欠点がある。名駅地下街のようなわかりにくい空間にわかりやすさを導入することで、今若者に注目される迷路状の街の魅力

創造できる可能性がある。

具体的には、名駅地下街をいくつかのブロックに分け、エリアごとに統一したイメージのデザインを施した街路空間を創出する。このような施策によって、殺風景だった地下空間が魅力的で個性あふれる空間に生まれ変わるばかりでなく、強力な場所性（場所のアイデンティティ）の出現で来訪者は今自分がどこにいるのかを認識しやすくなる。複雑な構造を持った地下街を歩きながらも、常に自分のいるエリアを肌で感じて認識できるようになり、「わかりにくいわかりやすい空間」が生まれる。そして最終的にはそこが地下街であることを忘れさせるような演出が必要である。それは来訪者にとっては擬似空間の体験になり、名駅地下街はいわば入場無料のテーマパークとして人々に非日常を体験させる。

従来からわかりにくい街はよくないものとされてきたが、各地でラビリンスの街が目まぐるしく注目を集めているように、わかりにくさを逆手にとってそれを魅力へ変えて活用する街づくりの発想が必要なのは

ないだろうか。それは近代的な都市の名古屋こそ求められるものであり、また注目されるはずである。そうした試みは、名古屋の都心再生、さらには都市観光への可能性を示唆するものである。

なお、シンポジウム当日、時間の関係で話せなかった内容をここに記そうと思う。それは、魅力的な観光地を作る上で、私が大切だと考える 3 点である。

1 つは、意外性のある、あるいはふつうなら売り物にはならない欠点でも、それを観光地の魅力に変えていく発想の転換である。例えば、暗い倉庫街をディスコに変えて一世を風靡した東京湾岸エリアや横浜、赤レンガの倉庫を改装して観光開発した函館ガーデン埠頭、レトロな街並みそのものを生きた博物館としている伊賀上野市街、など各地で成功事例がある。意外性ほど人々をひきつけるものはないからである。今回私が報告した、名駅地下街の迷路状の分かりにくさを逆手にとって、積極的に売り出していくという案も、こうした視点に基づいている。

次に、地元の犠牲を伴わない観光開発が望まれる。シンポジウムでも少し触れたが、白川郷のある白川村荻町集落や愛知県有数の紅葉スポットである香嵐渓では、観光客の車によって地元の生活道路が渋滞し、住民生活に支障をきたす事態が生じている。確かに観光化とそれによる混雑や環境悪化はトレードオフの関係にあるが、地元住民の

受忍を超えるような犠牲をはらってまで、観光開発をする意味はあるのであろうか。とかく行政主体、あるいは一部の商店が観光化に力を入れている場合には、こうした地元住民の生活との関係をいま一度考える必要がある。

そして、もう 1 つ重要なのは、成功している観光地は決して「押し付け型」ではないことがあげられる。われわれが観光客の立場になった場合、土産物店や観光施設、レストランや宿泊施設から駐車場にいたるまで、一方的に支出を強いるような勧誘などは心地よいものとはいえない。それは香港やハワイなどで、日本人観光客をターゲットにした商魂たくましい土産物店などに辟易している者たちには容易に理解されよう。残念ながらわが国の観光地でも多かれ少なかれ、このような一方的な押し付け型の観光地が多いものである。しかし、観光客はもしそこが魅力的であれば自らその対価を支払う意志を持つであろうし、また訪れたいと思うだろう。このように観光客が自発的に対価を支払い、またその観光地を楽しむ、こうした能動的な観光を可能にする観光地が望まれるのである。

後半部分は私の事例発表の内容からははずれるが、ここで言いたかったことは、都市観光であっても、従来型の観光地であっても共通することであり、魅力的な観光地を創出しようとする者たちは、常に留意しておく必要があることなのである。

## 東海北陸道の延長に伴う飛騨の観光客の動向について 新谷一男（岐阜地理学会理事）

富山・石川・福井の各県とほぼ同じ面積を持ち、20 の市町村に 17 万人が住む飛騨には年間 1,200 万人（平成 12 年度）以上もの観光客が訪れ、年々増加している。代表的な観光地には古い町並みで知

られる高山市（観光客 268 万人）、温泉町の下呂町（203 万人）、世界文化遺産の合掌屋敷集落の白川村（176 万人）、温泉と北アルプスの上宝村（171 万人）がある。続く観光地には乗鞍スカイライン

の丹生川村（89万人）、高山に似た古い町並みの古川町（63万人）があるが、他の町村は年間観光客が20万人～30万人前後と少ない。

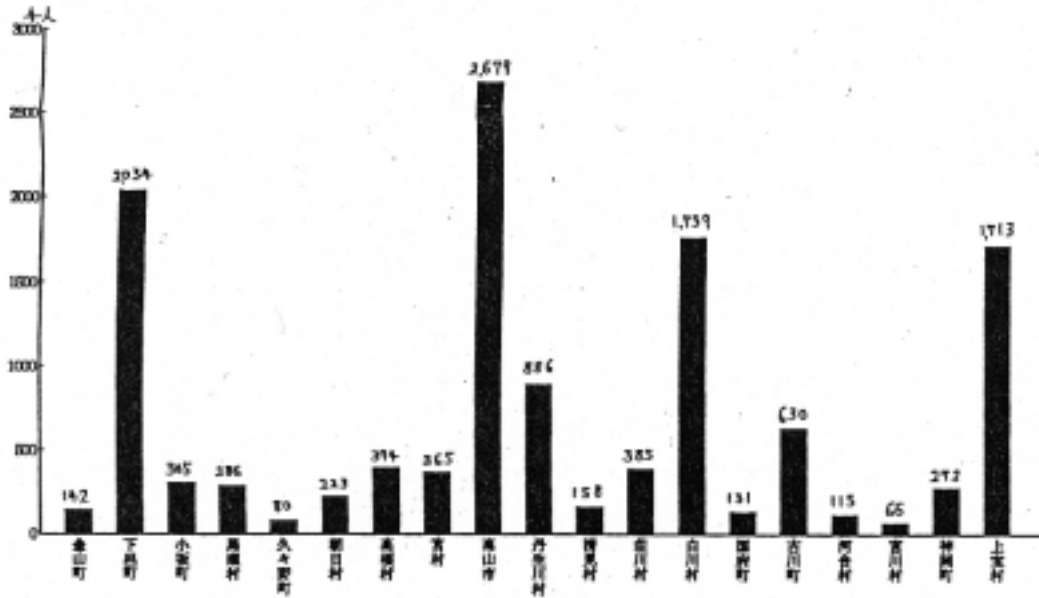


図1 飛騨の市町村別観光客数<平成12年度>

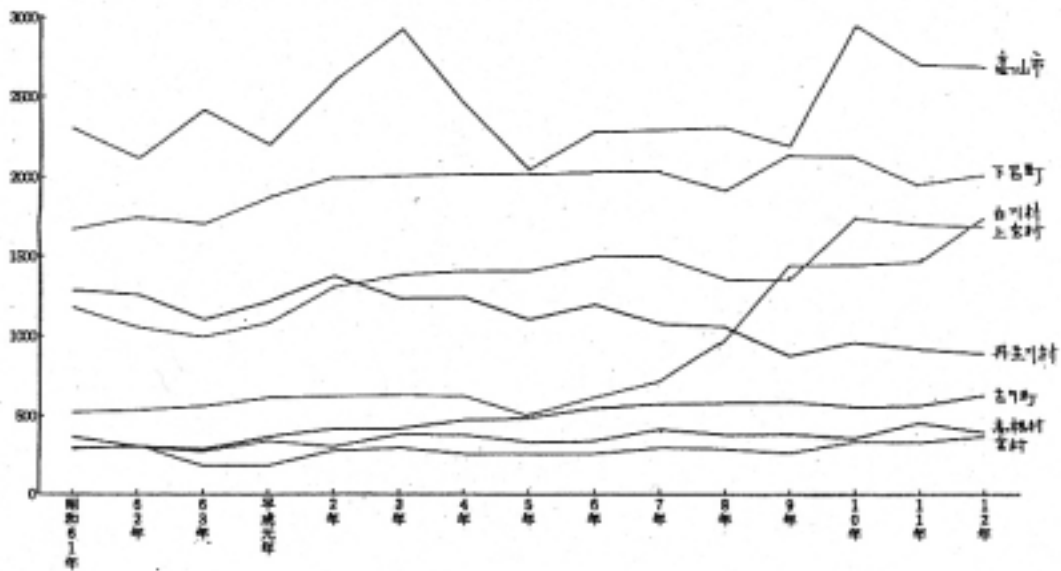


図2 観光客の動向<昭和61年～平成12年>

飛騨と他地域を結ぶ主要交通路は、南北にJRと国道41・156号線、東西に結ぶ国道158号線がある。現在、高山市と名古屋の時間距離は、JR特急

で2時間20分、国道41号線経由で約4時間である。東海北陸道が平成8年4月に郡上八幡町、11年11月に庄川村、12年10月には高山市の西隣の

清見村へと開通北進し、名古屋までが約2時間30分の距離となり、時間的にJR特急との差がほとんどなくなった。平成9年12月に北アルプスを横断する安房トンネルの開通で、高山・東京（新宿）間が5～5時間半（高速バス）で結ばれ、名古屋経由のJR（特急・新幹線）利用と時間的差がほとんどなくなるとともに年間通行が可能となり、関東方面との交通が至便となった。この結果、飛騨への観光客はJRや41号線利用よりも東海北陸道や安房トンネルを利用することが増えていると考えられる。

観光客は白川村の急増ぶりを筆頭に高山市・上宝村・古川町で増加している。白川村は平成1～6年に年間平均70万人だったが平成12年には176万人となり、僅か数年間で2.5倍に急増したが、この間の世界文化遺産への登録・東海北陸道が北進したことが大きな理由と考えられる。急激な観光客増加で村内を通る主要道路が歩行者天国状態となって車の往来に支障が生じ、畑が踏み荒らされ、放置されていくゴミが多いなど、地元住民の生活に影響が出ている。特に冬の合掌家屋のライトアップ時には、短時間に2万人近い観光客が訪れて、駐車場不足から豪雪地の路上駐車となり一般車両の通行が麻痺状態となったこともある。村では合掌家屋地区内を車両通行止めにして、観光客は地区外の駐車場からシャトルバスで訪れるという実験を試みたり、冬のライトアップ時に観光バスの来場制限をするなどの工夫をしているが、その効果はこれからである。

高山市の観光客は昭和40年代から年間を通して訪れるようになり、昭和60年頃には年間200万人前後、平成13年には300万人前後が訪れる全国的にも知名度の高い観光地となっている。観光客は平成10年以降の増加が目立つが、安房トンネルの開通、東海北陸道の北進により時間距離が短縮されたことが大きな要因として考えられる。従来は

中部地区からの観光客が中心だったが、関東・関西地区からが増加していることからわかる。

国道41号線沿いの下呂町は温泉宿泊客の減少が目立ち、平成3～7年に年間160万人前後であった宿泊客は平成12年に120万人に減少し、なかでも60%を占めていた東海地区からの宿泊客減少が大きい。飛騨西部を通る東海北陸道の開通により、飛騨を周遊する観光客が下呂を通過しないで直接高山へはいるようになったからと考えられる。また、関東方面からの客が20万人強/年であったのが17万人/年と減少したが、安房トンネルの開通がこれまで最奥地であった奥飛騨温泉郷を交通至便地とし、飛騨周遊観光客が温泉宿泊地を下呂温泉から奥飛騨温泉郷にかえたものと考えられる。宿泊客回復を目指して、料金値下げ・宿泊客の利用しない昼食時間帯活用の温泉入泉付きのランチバイキングなど集客努力がみられる。

スキー客の動向にも大きな影響が見られ、奥飛騨沿線の奥美濃地区へのスキー客は平成10年度156万人が12年度には219万人と増加し、飛騨地区では平成10年度105万人が12年度には88万人と減少している。名古屋から国道41号線で4時間近くかかっていた飛騨各地のスキー場から、東海北陸道を利用して2時間で到達できる奥美濃地区スキー場に人気の中心が移動したからと考えられる。この結果、飛騨では廃止される（平成12年12月）スキー場がでたり、スキー客回復のためにリフト料金割引や駐車料金の無料化などの対策を打ち出しているが、その効果はこれからである。

交通環境の変化に伴って出現している諸問題に対してそれぞれ自治体では対応に苦慮しているが、従来のような諸施設巡りの観光である限り、このような問題点解消はなかなか難しいといえよう。これからの観光の一つのあり方として、トレッキング・森林浴・自然景観を楽しむ等もっと自然の中へ溶け込むことなどが考えられる。

## 岐阜市の観光とまちづくり 河田敏春（岐阜市観光コンベンション課）

近年、旅行者のライフスタイルの変化により、観光の流れが変わろうとしています。従来の名所・旧跡をまわる団体パッケージ中心の金銭消費型から、地域の自然・生活文化を体感するソフトツーリズムへ、非日常性の殿様旅行から異日常性のライフスタイルを提案してくれるオルタナティブツーリズムへ、観光と生涯学習の融合などがみられます。住民が他の町に出かけ「生涯学習」をすることが、「観光」で自己実現や消費行動することと重なってきています。市民が喜ばないハードだけの箱物では、とても観光資源にはなりません。

「薬草」をテーマに、観光とまちづくり市民生活において、「環境保全」や「自然との共生」は当然のことで、レジャーにおいてもアウトドアの自然派志向が強くなり、食品においても「安全」、「無添加」の「本物」を求めるように生活者としての意識は変化しつつあります。

全国的にハーブやガーデニングなどが静かなブームとなり、欧米の豊かなライフスタイルが浸透し、新たな園芸農業の市場ができつつあるようです。

岐阜市では、高齢者の健康保持、とくに寝たきり老人の防止、生涯学習の推進、余暇環境の整備、観光客の増大、「美しく豊かな生活」ライフスタイルの提案、新産業おこしによる地域経済の活性化などが課題となっています。

「薬草」はそれを解決していくために非常に有

用な「キーワード」です。観光と生涯学習が共存しているような、行動提案型の薬草園、知的薬草遊園地と言えるような構想を練っています。そこで、まずハードよりもソフトを優先させようと「担当職員と利用団体の育成」のため、募集した市職員120名ほどで6年前から岐阜市立薬科大学の田中俊弘教授の指導を受けながら「薬草・ハーブ暮らしの植物研究会」を結成し活動を始めました。その研究活動や勉強会を、「市民講座」として広く解放しながら、「元気・健康、まちづくり！」を楽しんでいます。年々講座の種類も回数も増え続け、今までには8コースの講座 薬草講座、薬草・ハーブ栽培講座、ハーブ講座、アロマセラピー講座、わが町自然探索会、薬草染講座、東洋医学講座、キノコ健康講座を年間計45回開催、延会員数1,350名で、延べ8000名ほどの参加者を市の職員が、時間外にボランティア活動としてお世話してきました。

そのような背景の中で、長良川温泉旅館協同組合が「美濃薬膳」料理や「美の薬泉」薬湯を開発、他にも「薬草篝火染」、「薬草飴」や「枝豆もち」などの薬草関連の土産物も20数種生まれました。また、春日村との広域観光交流で、「伊吹じゃこ草シフォンケーキ」、「伊吹百草あられ」も商品として完成させることができました。

ますます、薬草で地域も市民も盛り上がっていきます。美しい岐阜県の自然を守り共生し、新しい薬草文化を育て、観光で経済波及効果を生み出せればと願っています。





【2001年度 巡検】

テーマ：知多半島にみる愛知の未来

日時：2002(平成14)年4月21日(日)

コース 栄・テレビ塔 東新IC <名古屋高速> 大高IC 知多市歴史民俗資料館  
名古屋港南五区(産業廃棄物処分場候補地)・新舞子マリンパーク 中部国際空港建設現場(常滑) 常滑陶磁器会館・やきもの散歩道 知多半島横断道路 寿司料亭「魚福」  
(半田・昼食) 国盛り「酒の文化館」・街並み景観 新見南吉記念館 半田IC <知多半島道路>  
南知多IC 内海のリゾート・旧回船問屋 豊浜漁港・魚広場 豊丘IC <知多半島道路・名古屋高速> 東新IC 栄・テレビ塔

雨にも関わらず、栄のテレビ塔下に参加者が集合し、ほぼ時間通りにバスは出発した。バスは、東新インターから名古屋高速に上がり、一路知多半島に向かった。まず、山田会長が参加者に挨拶し、ついで、案内者が本日の巡検の概略を説明した。

知多半島は、伊勢湾と三河湾に細長く突き出た半島である。地形的には、数十メートルほどの台地が大部分であり、沖積地は海岸部に注ぐ河川にわずかに見られるだけである。したがって、水も得にくく、基本的には生産力の低い寒村地域であった。しかしながら、人間の営みは与えられた状況のなかで様々な適応でもある。たとえば、江戸時代には、特産品としての知多木綿の生産や、回船による商い、漁労などを営んでいた。とりわけ、第二次大戦後の変化はめざましいものである。愛知用水の完成は知多半島に豊富な水を供給し、東海市沖の水面には巨大な埋め立て地ができ、東海製鉄(現在の新日本製鐵)を中心とした鉄鋼基地や電気・石油などのエネルギー基地ともなっている。そして、現在では常滑沖に中部新国際空港が建設中であり、さらに変化を遂げつつある。このような知多半島を具体的にみるのが今回の巡検の目的である。

まず最初に訪れたのは、知多市役所近辺にある、知多市歴史民俗資料館である。この資料館には、

かつての知多市域にあった日常的な姿が展示されている。たとえば、岡田地区を中心とした木綿産業とか、戦前・戦後の漁業の道具などがそうである。したがって、ここには全国に誇るべきあるいは歴史の上では特に貴重なものがあるわけではない。しかし、我々のほんの少し前に生きていた先人達の日常を展示しているという新しい視点の資料館である。

次の見学地は、名古屋港南五区と新舞子マリンパークである。名古屋港南五区は名古屋港埋め立て地の最南端の地区で、未だ埋め立て中の部分である。広大な港湾地区のなかでは意外に狭い感じだが、この地区があつた藤前干潟の代替地としてクローズアップされた最終産業廃棄物処分場候補地である。また、隣接する新舞子マリンパークは埋め立て地側に、名古屋港が親水施設として人工海浜を造り、旧来の海辺には、名鉄などの民間施設を配置した地区である。人工海浜については、兵庫県での事故もあり、また産業廃棄物処理場と海水浴場とのあまりの近さには何か違和感を感じる。

バスを15分ほど南下させると、常滑の町に着く。周年記念レースを開催している常滑競艇場を横目に見つつ、中部国際新空港の建設現場向かった。護岸堤防越しに見える建設現場は、雨の中に煙りながらも巨大な姿を現していた。空港島や前

島の護岸工事はすでにでき、本土と空港島とを結ぶ道路や鉄道の橋脚もできつつあった。現代文明の器機はまさに異次元の世界を作り出していると感じられた。愛知万博にあわせて完成を目指しているこの空港が、どのような経済効果や環境的影響を与えるのかは興味深い考察対象となろう。空港建設現場を後にして、常滑陶磁器会館に向かった。陶磁器会館は、迷路状の道が住宅地のなかに陶磁器の工場や窯が散在する焼き物散歩道の出発基地でもある。雨中のなか40分ほどの時間に参加者の有志が出かけた。しかし、まさに巨大迷路のなか案内人の大西氏が道を見失ったのは、エピソードといえよう。

半田市内の寿司料亭「魚福」にて昼食後、国盛の「酒の文化館」へと向かった。そこでは、ガイドの説明やビデオによって、酒がいかにして造られるのかといったこととともに、半田の酒が灘や伏見の酒に対して、新しい巨大市場である江戸まで半分の距離であるという「中国酒」の優位性をもつなどが説明された。そして、最後に試飲会となり、飲み比べに舌鼓をうつ会員もいた。「酒の文化館」をでると玄関前があわただしい気配となっていた。偶然ではあったが、その日は「半田祭り」であり、山車が数台出ることになり、玄関先の神社に着く頃であった。再興されたからくり付きの山車を図らずも見物することとなった。

思わぬ祭り見物で多少時間をロスしたが、次には、新美南吉記念館を訪れた。『ごんぎつね』などの童話作家として知られる新美南吉は、自らの出身地半田市岩滑の原風景を作品に投影させていると言われている。かつては、ごく普通の二階立ての住宅であった記念館も、コンペティションに

よる新しい姿に変わり、半地下式のモダンな建物であった。皇后陛下の胸を打った南吉の童話は蘇ったのである。

知多中央道を南下して、内海の町へと着いた。この時期の内海は人影もなく落ち着いた港の町にすぎない。しかし、夏には若者で溢れかえるのだろう。このような季節的な偏りを正したいという意図が、リゾート法への参画であり、温泉の掘削であろう。バブルの後始末もなかなか辛いものかもしれない。こんな、内海の町も、江戸時代には回船が盛んで、町は栄え長者達が生まれた。内海川に沿った山沿いに、うだつの上がった屋敷があり、それらを見学した。

雨中の見学会も、最後の目的地、豊浜の「お魚広場」に向かった。参加者も今日の手土産を買ったり、コーヒーをすすりながら最後の時間を費やした。ここからは、一路出発地のテレビ塔へと向かった。車中では、参加者からの感想や幹事へのねぎらいの言葉をいただき、ほっとしながら、無事終了された。

(文責、中村 豊)



常滑のやきものの小径